子年の大風

栗山慎悟

日本史史上最も有名な台風は、鎌倉時代に日本を襲来して蒙古軍を壊滅させた、神風と呼ばれる台風であるが、日本史史上最大級の被害をもたらした台風は、文政十一年八月九日（西暦一八二八年九月十七日）の台風ではないだろうか。

シーボルト台風

文政十一年八月九日（西暦一八二八年九月十七日）の台風は、日の暮れかかるころから雨は降りだし、九時頃から風雨となり、一時頃にはすさまじい暴風雨となり、家を倒し大樹の枝を折り、また根から吹き倒し、人を傷付け、浜は千二百丈の波に襲われるなど未曾有の暴風雨であった。十日の五時頃には風雨はしだいに弱まり、朝には風もおさまり小春日和となった。この台風は、長崎市内・長崎県内に甚大な被害を与えたが、もう一つ日本史に残る大事件を起こしている。

ドイツ生まれで出島オランダ商館医のシーボルトは、帰国のため準備していたコルネリウス・ハウトマン号が、台風のため稲佐沖に難破して、難破船から伊能忠敬作成の日本地図や、将軍家の葵の紋入りの羽織などの禁制品が見つかり、シーボルトは「日本御構え（国外追放）」「再渡来の禁止」の罰を受ける。

また、シーボルトに禁制品を渡した日本人も厳しい罰を受け、その数五十数人に及んだ。ゆえに文政十一年八月九日の台風がシーボルト台風と呼ばれる所以であり、シーボルト事件として日本史に記されている。

台風の勢力

九州西海上を北上して長崎西方に上陸した台風は、シーボルトの船を座礁させ、長崎県・佐賀県をはじめ大分県・福岡県・山口県に甚大な被害を与え日本海へ抜けている。被害状況は、死者一万人、全壊家屋四万九千戸、半壊家屋二万四千戸、流出家屋二万八千戸と推測されている。

また流出田畑、堤防の決壊、山崩れ、破船など多大な被害を与えている。この台風は、九日の夜九時頃から荒れ始め、翌十日の朝五時に暴風雨は過ぎていることから、強くて速度の速い台風であったと思われる。

この台風をシーボルトが観測している。九日の朝は、気圧一〇〇七hpa、気温二四，四度、湿度八九度、東の風、晴となっているが、台風が上陸してシーボルトが観測している家が倒壊する直前の観測では、気圧九五二hpa、気温二五度、湿度九七度、南東の風と記録されている。このことから中心気圧九〇〇hpa、最大風速五〇m、最大降水量三〇〇ミリと推測されている。

子年の大風

文政十一年八月九日の台風は、文政十一年が、戊子（つちのえね）にあたることから、子年の大風と呼ばれる。

長崎西方に上陸した台風は、勢力の衰えることなく佐賀県を直撃する。佐賀藩は、この被害状況を幕府へ報告している。その被害報告を『鍋島直正公伝（第一編）』から抜粋する。

水下田畠　七千七十一町五段余
汐下田畠　八千三百七町九段余
砂下田畠　三千七百六十五町四段余
潰家　三万五三六四軒
半潰家　二万一〇五七軒
焼失家　一六四七軒
怪我人　一万一三七三人
溺死　二二六六人
横死　七九〇一人
焼死　一一五人（男八〇人、女二八人、
按比数不合暫従原書）

他に、川や汐留の堤防の決壊、山崩れ、道路や橋の損壊、土蔵の倒壊、家屋の流出、倒木、破船、流出船、牛馬の被害など多大の被害が報告されている。

文政の大火

有田皿山は、深夜十二時頃から風が吹き荒れ、豪雨を伴う大台風となり、その中、岩谷川内の窯焼山口森吉方の素焼窯の火を吹き飛ばし大火となった。火は台風の中猛烈な勢いで燃え猛り有田皿山を舐め尽した。有田千軒と言われた焼き物の町は、岩谷川内に四十戸、白川に百戸、年木谷に十戸と頑丈な土蔵数軒を残し灰燼と帰した。窯の中に逃げ込んで煙により窒息する者、逃げ遅れて焼死する者、河川の氾濫によって溺死する者五十四人に及んだといわれる。

前記の焼失家一六四七軒の大部分は有田皿山のものと推測される。

『鍋島直正公伝（第一編）』には、有田皿山の惨状を次のように記している。

『古来未曾有の大災変にて、その損害も実に夥しかりしが、就中（なかんずく）最も酸鼻を極めたるは磁器産出地の有田にて、狭隘（きょうあい）の山間とて、風を避けつつ家々みな土蔵を閉じていたりしかば、折しも起こりし火災の災焔に裹（つつ）まれて、焚死（ふんし）したるもの無数なりき。』（原文のまま）

この火災により記録類も灰燼に帰し、大火以前の歴史を知ることが困難となった。有田では文政の大火として有田町史に記される。

《参考資料》
『肥前陶磁史考』中島浩氣著　青潮社
『日本歴史災害時典』北原糸子・松浦律子・木村玲欧編　吉川弘文館
『丸山遊女と唐紅毛人（後編）』古賀十二郎著長崎学会編　長崎文献社
『新・シーボルト研究』八坂書房